

50th Anniversary

DAIDO CAMPUS



ロゴデザイン
情報学部 情報デザイン学科
メディアデザイン専攻 4年
川端 一樹



大同大学
DAIDO UNIVERSITY

新たな50年を目指して

～苦難を乗り越え素晴らしい大学の基礎を築かれた諸先輩に満身より感謝～

大同大学 学長 澤岡 昭

はじめに

大同大学は平成26（2014）年4月1日に創立50周年を迎えます。大同大学の設置者である学校法人大同学園は同年1月1日に75周年、大同大学大同高等学校は同年4月1日に75周年を迎えます。

学園の初代理事長は大同製鋼（株）（現大同特殊鋼）第4代社長下出義雄氏、大学設立時の学園理事長・学長は錦織清治氏です。錦織氏は学園設立時、専務理事でした。

大同学園は日本の電力王・福澤桃介氏、下出義雄氏、大学設立の最強の後ろ盾であった元大同特殊鋼社長・石井健一郎氏を大恩人として語り継いでいますが、錦織清治氏の業績については余り知られていません。DAIDO CAMPUS 50周年記念特別号の冒頭、大同工業大学初代学長錦織清治氏について私の思いを述べさせていただきます。

私は平成11（1999）年4月に大同工業大学の学長に就任しました。過去14年余の間に多くの本学同窓生と話をすることがありました。大同工業短期大学と設立時の大同工業大学卒業生は、錦織先生がいかに学生思いの方で、寝食を忘れて人材育成に努力されたか、口を揃えて話すことに驚かされました。その錦織先生は昭和44（1969）年7月、65歳で急逝され、リーダーを失った大学はしばらく立ち上がれないほどであったと聞きました。

錦織清治先生

錦織先生は明治36（1903）年、島根県で生まれました。島根では錦織を“にしこり”と呼んでいるそうです。テニスプレーヤーの錦織さんも“にしこり”です。同窓生の多くも“にしこり”先生と呼んでいます。先生のご子息にお会いした時、“にしこり”ですか、“にしこり”ですかと聞いたところ、どちらでも良いとの答えでした。

昭和10（1935）年、錦織先生は東北帝国大学金属材料研究所助教授の時、大同製鋼に招かれ、研究部長や技術所長を歴任され、昭和25（1950）年に常務取締役役に就任されました。東北帝国大学の学生時代には修養団という団体の学生寮で過ごされました。

修養団は現在、公益財団法人として、子どもを対象にした自然体験キャンプや海外の恵まれない子どもたちとの交流活動のほか、家庭教育や社会人教育など多彩な教育事業を展開している団体です。この修養団は明治39（1906）年、蓮沼門三氏が東京府師範学校（現・東京学芸大学）に設立した団体です。同氏は学校寄宿舎が汚れていたことに胸を痛め、一人で掃除をはじめたところ、同志が集まりこれを機会にできた団体と言われています。修養団の理念「愛と汗」に共感した錦織先生は人を育てることを生涯の仕事として、寝食を忘れて学園の仕事に没頭されたのだと思います。

錦織先生は特殊鋼の研究者としても著名な人であり、大同製鋼においては研究だけではなく、入社4年後に設立された財団法人大同工業教育財団の専務理事として大同工業学校の設立に奔走されました。教育熱心であった当時の下出義雄社長が学校設立のために錦織先生を東北帝国大学から招へいたのか、研究開発を強化するために招へいたのか、どちらが先であるかについて、当時を知る人に聞いてみましたが確かな答えを得ることができませんでした。

建学の理念・精神

現在、全ての大学は7年ごとに認証評価と呼ばれる審査を受けなければなりません。このための準備に1年以上かかるほどとても厳しい審査です。第1回の審査は大同工業大学時代の平成19（2007）年度、第2回を1年前倒して今年度受審の最中です。結果が知られるのは来年3月です。第1回審査では、建学の精神に基づいて大学が運営されているかが重要な評価ポイントでした。

本学では建学の精神を端的に表わした標語を定めていませんでしたので、大学設立以来の資料を整理した結果、「わが国の産業界が必要とする人材を養成する」との本学の建学の精神は、大同工業学校設立時と変わることなく、現在でも脈々として引き継がれている。ただし、近年、わが国の産業構造は多様化しており、産業界が必要とする人材も多様化しているため、建学の精神を継承しつつ、教育内容も多様化しつつある。」と記述しました。

一方、昭和24（1949）年に学園理事長に就任した錦織先生は、大同工業学校を改称した新制工業高等学校でご自身のモットー「汗と愛」について機会ある毎に話され、この標語が現在の大同大学大同高等学校の建学の精神として掲げられています。

昭和37（1962）年に設置された大同工業短期大学においても「汗と愛」を強調されました。昭和39（1964）年に設置された大学でも「汗と愛」を本学の建学の精神とすべく努力されたことを本特集号の青山教授の原稿に発見しました。

本年度の第2回認証評価にあたり、前回の認証評価で述べた建学の精神「わが国の産業界が必要とする人材・・・」を大同工業大学から大同大学に名称変更したことに合わせて「産業と社会に貢献する人材を養成する実学の府を目指す」に変更し、全学の合意を得ることができました。今後これを建学の精神として掲げていきたいと考えています。

一方、錦織先生の唱えられた「汗と愛」は本学の建学の理念として今後も生き続けることでしょう。



産業界への感謝

錦織先生がいかに優れた方であっても、個人の情熱だけでは大学を創立することはできません。教育の重要性を積極的に実践してきた大同製鋼（株）の組織文化があったからこそできたのだと考えています。

大同製鋼（株）は現在の大同大学と高等学校の敷地のほとんどを学園に寄贈されました。当初の建物や設備のほとんどは同社から寄贈されたものです。これがなかったら大同大学は存在していなかったと思います。昭和37（1962）年、大同工業短期大学設置のため31の企業から多大の援助を頂きました。

大同特殊鋼（株）はじめ本学の設立に多大の援助を頂きました多くの企業と個人の皆様に満身よりお礼を申し上げます。

新たな50年を目指して

大同大学は人を育てる大学です。本学は大学院設置のために特に研究業績に優れた教員を採用し、研究を奨励した時期がありましたが、平成4（1992）年に就任した戸澤学長の提案「教育重視型大学への自覚的転換」が教授会で決定されて以来、教育重視型大学への道をまい進してきました。

若年人口の著しい減少により大学全入の時代が到来し、これから20年以内に約1/4の大学が統廃合されることを視野に大同大学が生き残り、社会が真に必要とする人材育成を行う大学として発展するためには教育重視にまい進することが唯一の進むべき道であると信じています。これが大同大学の建学の精神に沿うことであり、錦織先生への恩返しであると確信しています。

最近、大同大学は、学生が卒業後、タフな人材として産業と社会に貢献できるような新しい教育システムの構築に取り組み始めたところです。就職を視野においたアクティブラーニングと呼ばれる新しい手法をカリキュラムに取り入れる準備を行っています。このことによって、教員の負担は重くなりますが、本学の生き残りと発展に必要な条件であると考えています。皆様のご理解とご支援を節にお願いする次第です。

おわりに

このDAIDO CAMPUS 50周年記念特別号は大同工業短期大学1期生であり、同時に大同工業大学1期生の杉浦正勝氏（本学名誉教授）に学生時代の思い出、大学4期生の青山正治機械工学科教授に50周年を迎える大同大学への想いを寄稿頂きました。最後に元管財部長の田中諭氏に学園事務職員目から見た短大設立とその後の15年間の激動についてまとめて頂きました。

末筆ながら、大同大学をここまで育てて下さった大同特殊鋼はじめ中部産業界の先達、卒業生、後援会、地域社会の皆様に関後の精進をお約束してお礼の言葉と致します。



大同工業短期大学と大同工業大学で 過ごした学生時代の思い出

大同工業短期大学 第1回卒業生

大同工業大学 第1回卒業生(62M)

大同大学 名誉教授 杉浦正勝

私は縁あって、たまたま、大同工業短期大学と大同工業大学の第1回の卒業生である。大同工業高校3年生の3学期、進路を担当の先生に相談した。先生から、次年度(昭和37年)に短期大学が創設されるとの話を聞かされた。また、その2~3年後には4年生大学に昇格するので大学に進学するように勧められた。両親に相談した結果、これからの社会は高度な技術が必要になるから大学で知識を身に付けるように言い聞かされ、短期大学の機械科に入学することにした。創立時は機械科のみでスタートした。定員は80名、その内、一般学生が60名、会社(例えば、大同製鋼、矢作製鉄、日本発条、富士パルプ等)から派遣された委託学生がおおよそ20名、全部で80名の2クラスであった。特に委託学生は大学創立に賛同していただいた企業から選抜されて入学した人たちで、皆優秀な学生が多く、数学や英語等いろいろ勉強を教えていただき、刺激になった。



▲大同工業短期大学の校舎

当時の教授陣は大同製鋼(株)(現 大同特殊鋼)で研究所長をしておられた錦織清治学長や草ヶ谷圭司副学長をはじめとして、黒田正夫(機械工作担当/当時 理化学研究所所属)、佐藤申一(歯車の権威)、鈴木馨(文学/馨ちゃん愛称)、荒木鶴雄(工業材料)、服部延春(製図の権威)、上森正勝(工業経営)、石橋正二(熱工学)、福住靖治(物理)、福原達三(材料力学)、中井三之助(数学)、増田末雄(心理学)、井藤正照(機械工作)、横井時秀(鋳造工学)、奥村哲郎(ドイツ語)、本田敬太郎(電気工学)、下出幸雄(金属工学)、前田利男(英文学/ジョンミルトンの権威)、関口春次郎(溶接工学の世界的権威)らの諸先生他、立派な教授陣から多くの知識を授かった。今でも、当時の授業風景が頭の中に浮かんでくる。一生忘れないだろう!!!!

特に、前田先生(英文学)は特異の先生の一人であったと思う。講義の時間、まず10分位は英語に関する話をして、あと残りの1時間20分は自分の自慢話や世間話で終わってしまう。しかし、先生の話術はうまいもので、何か魔法にかかったようだった。話を聞いているうちに、心の底から、勇気づけられ、これから頑張らなくては行けないという思いが何処からとなく湧いてくるのである。不思議なものであった。

毎回の講義が楽しく、一番前列で聞いていた。学問以上に大きな物を授けていただいたと思っている。

当時、下出先生(金属工学)に伺った話であるが錦織学長が金属材料を講義していた。最後に、期末試験をして、その採点を下出先生に頼んだ。答案用紙を投げて一番近いところに落ちた答案を「優」、遠くに飛んだ答案用紙は「良」、「可」または「不可」は付けられないように指示されたとの話を聞いた。あまり悪い成績を付けると就職時に困るとの親心から出たものと思う。なんとほほえましいことかと思った。

また、教授陣の多くは優良企業において、第一線で活躍していた人たちが多くいて、理論だけでは理解できないことも、企業内で起きた実例をもとに、詳しく教えていただいた。

当時は学生数に対して、教授陣が比較的多くいたので、マンツーマンで教えていただいた。

昭和38年には電気科が開設された。全体に、こじんまりしていたせいか、機械科と電気科の隔たりが無く、双方が気楽に交流していた。

そうこうしている間に2年間があつという間に過ぎた。昭和39年の4月には短期大学が廃止され、4年制大学の大同工業大学が産声を上げた。しかし、昭和37年に短大に入学した学生は学則上、そのまま4大の3年生に編入学することができず、4大の2年生に編入することになった。そこで短大を卒業して就職するか、4大の2年生に編入するかを選択に迫られた。

私は短大の時、中学校教員免許(技術家庭科)を取得していたので教員を志望したが、就職担当の石橋先生の勧めもあり、4大の2年生に編入することにした。

2年生を再度行い、5年がかりで大学を卒業した。短大卒業生の約半数は一度就職をしてから再度3年生に編入しなおした。私のようにそのまま2年生に編入したものは1年余分に勉強するので多くの単位を取得することができ、比較的楽に卒業することができたが、一度就職して再度3年生に編入した学生は卒業単位を取得するのに大変苦労していたことを記憶している。

4年制大学は創設時に機械工学科と電気工学科の2学科で発足した。その頃は現在の大同高校の敷地に5階建ての小さな校舎が1棟だけぽつんと建っていた。キャンパスの敷地は狭く、大学というには程遠い光景であった。当時、校舎やキャンパスは他大学に比べ、立派ではなかったが、その時代の教授陣は企業の第一線で活躍していた人や国立大学教授の経験者が多くいた。教授陣の多くは短大からの先生方に加え、磯村教授、有馬教授、加藤教授、伊藤（哲）助教授、江口教授、八田教授、中山助教授、松永教授、藤本教授、羽村教授、尾崎講師、指宿講師、井塚講師、渡辺助教授、小松講師、田村講師、今井講師、吉村講師、光明講師、鬼頭講師、兼田講師、柴田講師、西河講師、藤井講師、福原講師、棚橋講師、田中講師、竹上講師、古庄講師らの先生方が新たに加わった。

特に、当時、機械工学科では図面が読めて、描ける技術者を養成することに力を入れていた。本館5階に製図教室があり、数百台のドラフターが設置されていた。当時の工業大学でこれだけの製図器具が揃っているのは珍しかった。

今でも思い出すが、週1回、午後の3、4時限目は設計製図の時間に当てられていた。この時間はウインチ、ポンプまたはコンペアーを設計し、図面を描いて提出する授業である。毎回授業では友達と話ばかりしていて、なかなか図面が描けなかった。2時間で精々製図用紙に外枠と少しの部品を描いて終わることが多かった。組立図を描くまでには程遠く、締め切り日が近づき、焦るばかりであった。

学校で描けなかった分、締め切り間際に家で何日か徹夜をし、目を腫らしながら何とか図面を提出したことを覚えている。

今も時々、夢の中で図面が期限内に提出できなくて、留年した夢をみる。

当時の機械工学科のモットーは図面が読め、描くことができる技術者であることはもとより、英語が話せる技術者を養成するとの趣旨から、工科系の大学では珍しい、語学教室LL（ランゲージ・ラボラトリー）が備えられ、徹底した英語教育が行われた。外国人教師もいて、英語教育に力を入れていた。私は学校からの勧めもあり、当時は高価であったタイプライターとテープレコーダーを購入した。また、英文学の教授の指導もあり、短大と4大を通じて、英会話部（ESS）に所属していたおかげで、英語には少し自信がもてた。

時間がたつのは早く、短大から4大までの5年間はあっという間に過ぎてしまった。いろいろと個性のある先生方と接することができて、多くの知識や考え方を授けていただき、大いに満足している。

5年生の8月、第一希望の工業高校の教員採用試験に合格することができたが、就職担当の教授から、先生になるなら大学に残り、もう少し勉強を続けたらとの指導をうけ、大学に助手として残ることになった。

大同学園には大同工業高等学校、短期大学、並びに大同工業大学（現 大同大学）の学生時代そして大同工業大学（特任教員、非常勤講師を含む）の教員になってから通算、何と54年間、お世話になった。感謝の気持ちでいっぱいである。

発足当時の大学のことを思うと、現在は著名な教授陣、りっぱな校舎、設備が整い、充実したキャンパスに生まれ変わり、今の学生諸君は幸せだと思う。

次年度で大学創立50年、ここまで育ててくれた多くの関係者に心からお礼を申し上げます。これからは国内のみばかりでなく、海外にも名声をとどろかす大同大学に躍進することを2万5000人余名の卒業生が応援しています。

大学創立50周年まことにおめでとうございます。



▲創立当時の大学校舎



▲製図の授業風景



▲工学実験の様子

夢を未来へつなぐ 舞台裏

大同工業大学 第4回卒業生(67M)

大同大学 教授 青山正治

私と大同学園とのかかわりは、学生、生徒および卒業生、43年間にわたって教員として勤めたことである。本年12月14日に举行される大同大学創立50周年記念式典と同じ期間まで通学、通勤したことでもあります。この間には、多くの諸先生からさまざまな大学の諸活動や歩みを聞く機会があり、私が見聞きしてきた創立時の四半世紀の舞台的一幕を紹介いたします。

開学記念日

すでにご存じと思いますが大同大学の開学記念日は5月10日であり、大学の祝日になります。開学記念日は、国民の祝日が4月末から5月初めにかけていくつかあることから講義日程のやりくりが難しいことでもあり、この1週間あまりを集中休日にしていて、今では授業日になっています。大学開設した当時は、この記念日に学内外から講師を招き講演会などを開催していました。

この記念日は、1962(昭和37)年5月10日に本学で大同工業短期大学の開学記念式典を挙行了した日に決めたわけです。すでに同年1月には文部大臣から短期大学の開設許可を受けていましたが、学生を受け入れるための入学試験や宣伝などの種々雑多な業務があわただしく進められて行く中で、無事に入学式を終え、授業も開始され、安堵した時期でもあったわけです。この記念式には、文部省を始めとする近隣の大学、高等学校の教育関係および産業界の関係者を招き、在学生らとともに一緒に祝いました。



大学の建学の精神

大同大学の設立は、多くの私立大学の創設にあるような個人の浄財によってつくられたものではなく、民間企業によって運営される企業立大学に相当します。このため大学創設の動機や目的など、熱く語られるような機会が特になく、今となっては当事者から聞き出すことも不可能であり、記録さえも探し出すことは難しくなっています。最近になってリーフレットのものはあるが資料を見つけたので、後世の歴史研究の一助となろうと思い、その全文を掲載します。

この資料は、1967(昭和42)年の入学生募集案内の巻頭言です。錦織清治初代学長は、前段落で本学の建学精神を「汗と愛」とし、校風を「自主と堅実」としています。後段落では、学生教育の目的とその方針について表明しています。

学長、工学博士 錦織 清治

本学は昭和39年中部産業界の強力な支援を得て機械・電気の2学科からなる工業大学として発足したのであるが、去る昭和14年現大同工業高等学校の前身たる大同工業学校が設立に当たり、教育の信条として掲げた「汗と愛」をもって本学の建学精神とし、この精神を通じて「自主と堅実」の学風を育てたいと念じている。

大学の目的とする学問技術も、人格形成も単にとおり一ぺんの教育技術のみで効果をあげ得るものでないことはいうまでもない、本学はいたずらに規模のマンモス化による量的拡大は考えず、むしろ学生個々の質的充実に重点を置き、できるだけ多くの一流教授陣と少壮気鋭の助教授その他の人士をむかえて、1対1の教育理想の下に、教授と学生が常により多く接触を保ち、もつて豊かな人間性の陶やと、真に有為な人材育成に向って努力することが教育本来の使命と信じ、学を挙げて精進している。

ここでの本学の建学の精神を表明した「汗と愛」の出典は、錦織学長が東北帝国大学の学生時代に社会教育団体の修養団で少しの間寄宿生活した際の修養団・二大誓願の「愛と汗」の精神から採用したものです(大同工大新聞 昭和44年9月26日追悼号 p4)。この修養団は、1906(明治39)年に日本の社会教育家であった蓮沼門三が東京・四谷左門町に設立した青少年の健全なる育成と世界の福祉・平和に寄与することを目的に明治時代の学生たちによって創立し、現在においても青少年の育成事業の活動を続けています。

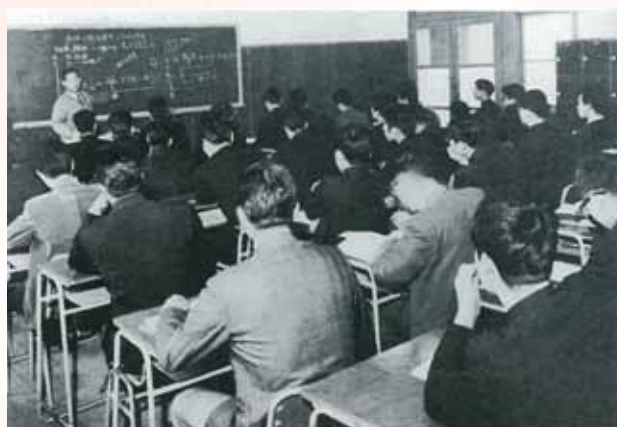
ところで、錦織初代学長の言葉が建学の精神になり得るのか歴史的な考察が必要となります。本学の創始者である下出義雄(旧大同製鋼(株)社長、父 民義氏に協力し旧東邦商業学校設立)先生は、技術者の育成に情熱を向けて1939(昭和14)年1月財団法人大同

工業教育財団を設立し、財団の理事長を務めて大同工業学校を開校しています。この財団運営の実務責任者が錦織初代学長であり、財団設立時から理事に就任していたことから確かなことです。その後、戦後の学制改革に合わせて下出理事長から引き継いで1949(昭和24)年には学校法人大同製鋼奨学学園の理事長(現 大同学園)に就任しています。錦織理事長は、1962(昭和37)年に工業短期大学、1964(昭和39)年には工業大学を設立し、学長であり理事長・専務理事の執務を続けて1969(昭和44)年6月17日に病に倒れ逝去(享年65歳)されました。いまこのような歴史を顧みれば、学校を創り、育てたもう一人の立役者が錦織清治初代学長になるでしょう。このように考えれば、まさしく大同大学の建学の精神は「汗と愛」であることに疑問の余地を挟むことができません。

また、1936(昭和11)年当時に大同製鋼(株)に勤務していた井塚政義教授(大同工業大学名誉教授)が、大同工業教育財団創立に向けての寄付行為(学校の組織・活動を定めた規則)を作成していたことは興味ある記事です(大同学園40年史 p34)。私たちの学生時代には一教師であった方々が、深く学校の設立や運営にかかわりを持っていたことを忘れることができません。

短大・大学の設立準備

1955(昭和30)年代の日本は、高度経済成長期を迎え、高等教育機関への進学熱が高まってきた時代でした。本学においても進学希望者の急増対策に答えるために大学の開設が望まれ、1962(昭和37)年に短期大学設置に向けて準備が進められました。その準備には、短期大学への学生確保が命題でした。横井時秀教授の記憶では、1961(昭和36)年4月に大同工業高校機械科3年次に1学級の進学クラス(50名程度)を設けて、短期大学への学生確保の対策を行ったということです。この方策の結果、短大第1期入学生は機械科の定員80名を越える83名を確保できたわけです。短大第2期(1963年)入学生は、機械科129名であり、この年に新設したばかりの電気科(定員40名)は13名でした。電気科入学生が少ない理由は、1964(昭和39)年4月には4年制大学が開設されることがすでに判っていたからです。また、すでに短大に入学している学生を4年制大学へどのように移行させて行くかが大きな課題となり、その解決策を4年制大学機械工学科(定員80名)へ1年次および2年次から入学可能とし、電気工学科(定員40名)への入学は1年次から計画したことです。大同工業高校は、1967(昭和42)年に大同工業大学への連繫を念頭に正式に“Bコース”と呼ぶ進学クラスを機械科に置き、大学と高校間で高大一貫教育体勢を整えるまでに発展させました。



▲大学の授業風景

一方、学生のクラス分けと学籍番号は、同窓会会員名簿を見ると、現在と短大・大学開設初期の在籍名簿の学籍番号の付け方が異なっていることに気づかれると思います。短大から大学第4期入学生(1967年)までは、クラス編成を重視して学生を配属させていました。このため、クラス毎に五十音順の姓名から学籍番号の振り分けをしていました。現在では学科制が一般的ですが、この時は学科の中に構成されているクラス制を重視していたためです。開設初年度の短期大学には、実質的な校務を担当できる教員が7名のみで、連日夜更けまで校務事案の会議が行われていました。当時の教員や職員は、本学へ迎えるまでは大学や研究所に所属していたり、企業の技術者、大同工業高校の教員が移籍して大学構成員になっていたため、校務は高校と同様な方式のままで移行していたそうです。

短大・大学の開設初期は、学内のキャンパス(余りに狭い当時の大同校舎)に黒色の学生服を着用した、いずこかで見ていた顔ぶればかりでした。これは、上述の進学クラスの影響でもあり、短大や大学入学生の半数～3割を大同工業高校出身者で占有していたことによります。学生間では、気心が通って、何ら高校生活と変わらぬ状態でした。学生の中での唯一の違いは、旧大同製鋼(株)、旧矢作製鉄(株)、旧理研ピストンリング工業(株)などからの極めて優秀な委託学生・委託生が入学してきたことです。

また、3月25日の卒業式やその他の学年暦に関する開講期日や夏休み等は、名古屋大学の日程を採り入れることが慣例になっていました。

学生の指導と課外活動

学生生活の指導・相談に本学は短期大学の設立当時から指導教員制(当時の大学で29%)を採用していましたが、当時はクラス担任制(36%)が主流でした。ここであえて指導教員制度を導入したのは、学生と教員との人間的な交流を深める一貫として、学問を授けられる

学生の姿勢を指導するとともに、いつでも学生の生活相談に応じることを目的としたものでした。しかし、創設期には実質的な活動を行っているものでもありませんでした。その後、1980(昭和55)年前後から入学試験学力低下と学生の退学者が増加する事態に至り、留年する学生が38%にもなって学生指導体勢を見直すこととなりました。この結論は、学生の学修指導と共に学生の生活相談に全学の教員が応じることであり、授業科目として開講することでした。この授業科目の名称は、前田利男教授の提案で Academic Advising seminar とし、これを「A A セミナー」としたわけです。講義は、必修科目として1年次に毎週1回90分間の授業を1年間に渡って1981(昭和56)年4月から開始されました。講義の内容は「専門分野について学習する」「新聞、雑誌などをつかって社会一般について知る」「スポーツなどで身体を鍛え、チームワークを築く」などを実施することで、学生と教員の相互交流を行うことでした。しかもお茶菓子程度の予算も付けられました。当時の大学としてはユニークな学生指導で、後にはこの方法を採用する大学も現れました。

また、大学設立当時からクラブ活動が活発に行われており、体育会系ではスキー山岳、ボート、バレーボール、ワンダーフォーゲル、軟式野球、ハンドボール、テニス、弓道、柔道、空手、応援団、ダンスなど、文化系では自動車、E S S、映画研究、写真、音楽、新聞会、心理、化学など、クラブ数は30クラブを超えていました。このほかに工業大学であることから実際の産業界を見学する機会や体験をすることを目的に卒業研究を名古屋工業試験所、名古屋市立工業研究所、大同特殊鋼中央研究所、三菱電機製作所を始めとした近隣の企業に依頼し、多くの学生が研究・技術について学ぶ機会を得ていました。しかし、この15年前から積極的に学外で研究指導を望む学生がいなくなり、実体験型の教育は消滅してしまいました。

また、卒業研究と学生の自主的活動をかねて工場見学や夏休み中のゼミとして日本各地の工場を見学することも常に行われていました。1970年代には教員と学生が韓国にまでゼミ旅行に出かけています。私設の鋳物研究会では、1968(昭和43)年より有志の学生が集まって、資格取得のための勉強会や工場見学、余暇の有効利用を教員と一緒にやって行ってきました。例えば夏季休暇中のグループ旅行を企画し、岩手県、山形県の伝統的な鋳物工場見学や三陸海岸まででかけて製鉄所・鉱山の見学、鳥取・島根県の工場、四国の高知・香川県はもちろん、九州では唐津市・佐世保市・長崎市から鹿児島市の集成館、種子島の砂鉄採取などへの毎年の見学旅行です。



▲1972(昭和47)年8月 佐賀鍋島藩反射炉日新小学校にて



▲1975(昭和50)年7月 大同製鋼木曽福島工場の見学



▲1983(昭和58)年7月 種子島にて砂鉄採取



▲1984(昭和59)年6月 大同特殊鋼木曽福島工場の見学



同窓会活動

卒業生相互の親睦団体である大同大学同窓会は、短期大学の第1期卒業生を送り出した1964（昭和39）年春に設立しています。しかし、気の早いもので卒業生を送り出す前に同窓会年度総会を開催しました。1965（昭和40）年11月21日には、大同工業大学同窓会と名称変更しています（大学最初の卒業生は、1967（昭和42）年3月25日に卒業した短期大学から第2年次編入した学生になる）。

主要な同窓会活動は、会報や会員名簿、年次総会を行うことであったが、発足当時は十分な活動までには至っていませんでした。1967（昭和42）年春には大学最初の卒業生を送り出したこともあり、当時に同窓会事務局長を務めていた煤田浩氏が同年11月に第1号の会員名簿発行を達成しました。会員名簿というものは卒業生を輩出するごとに発行するのが主旨と思いますが、卒業生が1000名に達する頃になるとその名簿のリストアップや会員の移動等の掌握が行き届かずに第2号の名簿発行が1971（昭和46）年11月になってしまいました。第3号の会員名簿発行は、さらに遅れて1977（昭和52）年11月になりました。この時の会員数は3000名にもなり、卒業証書発行書類からの名簿リストアップと会員の所在把握に手間を要し、名簿発行のための印刷費、所在把握の通信費が必要になり、当時の終身会費（一人2000円）のみではどんなにしても支弁できない程の金額となっていました。この資金不足は、同窓会の唯一の運用財源が会費であるが、毎年の卒業時期に全卒業生から完全徴収できず、なかば任意会費制となっていたことに起因します。

第2代会長であった山野清市氏は、名簿発行のための印刷費用も捻出が難しい状況下であったので、大同学園専務理事の霜村忠雄氏に印刷費の一時の借用を願い出ましたが、「同窓会に貸出すお金の余裕はない、自らの努力によって調達すべき」との答が返ってきました。これ以来、同窓会役員は、人に頼るということなく、自主性を持った同窓会活動をすることで意見が一致しました。これ以降の同窓会活動は、これまで以上に活発になり愛知県内の私立大学同窓会の中ではいつも躍動的であり、いつもユニークな活動ができる同窓会として羨望を集めています。

来年（2014年）には同窓会創立50周年を迎えます。同窓会は、この間にほぼ5年ごとに周年事業を開催してきています。1987（昭和62）年11月には20周年祝賀会と、日本の宇宙開発の父と呼ばれた糸川英夫博士の講演をホテルナゴヤキャッスルにおいて開催しました。これまでの同窓会周年事業の最大は1994（平成6）年10月30日の30周年行事になります。30周年事業のうち記念式典と記念パーティーを名古屋東急ホテルにおいて開催しました。さらに愛知厚生年金会館大ホールにて浜田一馬氏に作曲を依頼し「大同工業大学のための交響曲第13番『和』ハ長調作品95」のコンサートならびに手塚治虫作の「火の鳥」を主題にした歌劇オペラを上演しています。この他には、同窓会では魚のハゼをモチーフにした“ゴビー”キャラクターの意匠から、これに付随してバンダナやペンダント、ネクタイ、Tシャツなどのグッズを制作し、同窓生から好評を得ました。また、学生の急減期をこれから迎えようとしているこの時代、大学の立地が重要であることから卒業生の大谷隆君や在学生に依頼し、名古屋の副都心になることを想定して大同町・滝春町一帯の人・モノ・自然が創り出すシンフォニックな街“Symbiosis City 2010”プロジェクトを立ち上げ、近未来の大同大学の夢を語りました。

足跡を記録に留めよう

「十年一昔」とよく言われます。世の中の移り変わりが激しく、街の風景や人の面影、記憶は10年もすれば昔のこととなって失われてしまいます。大同大学が設置されてから半世紀を越えるまでになりました。大学設立当時の学生は、すでに年齢は還暦をとっくに越えて70歳に近づいています。

時がたてば人の記憶は失せてしまいます。大同大学の足跡を後世までに残すには記録書が必要です。この創立50周年を記念して、大同大学における設立の経緯、その時の人は何を思い成し遂げようとしたのか。これまでの教育事業における調査と検証および評価を行う研究によって”夢を未来へつなぐ道づくり”を願うばかりです。これがまさしく礼記に記載される「大同」の源義であり希求すべき大道になろうか。

幾多の試練をのりこえて

～大同工業短期大学誕生前夜からの15年間～

元学校法人大同学園 管財部長 田中 諭

大同学園の源流

大正から昭和にかけての代表的な実業家である福澤桃介翁は、木曽川の大規模な電源開発により得られた大量の電力を利用して幾多の事業を興した。

大正5年(株)電気製鋼所が設立され、大正11年大同電力製鋼部と合併し、(株)大同電気製鋼所となり、後に社名を変更して、大同製鋼(株)へと発展した。

昭和14年、大同製鋼(株)第4代社長、下出義雄氏は学研肌の方で、教育に情熱をもたれ「産業界の要請に応える有能な技術者を育成する」という志のもと、同社の出資により、財団法人大同工業教育財団を設立、甲種工業学校として、大同工業学校を設置、自ら理事長に就任、専務理事には、同社の錦織清治氏が就任した。

大同工業高等学校の設立

太平洋戦争末期から戦後にかけての大同工業学校の運営は平坦なものではなかった。昭和20年戦災により、道徳にあった校舎他諸設備は壊滅状態になり、昭和22年4月、南区白水町にあった大同製鋼(株)社員寮を譲り受け、改造して本校舎と実習工場が完成、やっと落ち着いたかに見えた矢先、またしても火災により校舎1棟と実習工場が灰燼に帰した。その後の苦労は筆舌に尽くし難いほどであったが、苦難を乗り越え、昭和23年大同工業学校は新制高等学校として認可され、大同工業高等学校となった。

昭和25年9月大同製鋼(株)より、大同町にあった前専門養成所の施設と設備を譲り受け、現在の大同大学大同高等学校の基礎ができた。それまで実質的には大同製鋼(株)によって運営されてきた学校経営の主導権が、名称変更された財団法人大同製鋼奨学財団に移り、前年度第4代理事長に就任した錦織清治氏のリーダーシップのもと、新たに法人事務部が設けられ、名実共に学園独自の経営がスタートした。

昭和30年代には入学志願者が急増、昭和34年5月には待望の鉄筋コンクリート造り4階建の校舎が建設された。ところが、昭和34年9月史上最大といわれた伊勢湾台風により白水実習場は流失、新築の校舎も相当なダメージを受けた。しかし、翌年9月には、実習設備の復旧と、実験・実習室の増築・拡大を目的として、鉄筋コンクリート造り、地下1階、地上4階の建物が建設された。

このような幾多の大事に遭遇し、これでお終いと思った学園を支え、復旧の原動力となったものは、建学の精神と大同製鋼(株)のご理解の賜物であった。特にこの苦難の時期に責任者として陣頭指揮された錦織理事長始め関係者の努力と忍耐には計り知れないものがある。



▲社員寮を改築した校舎



▲専門養成所を譲り受け授業再開



▲新校舎



▲実験・実習工場「修技館」

大同工業短期大学の開学

昭和35年当時、我が国の社会は戦後の荒廃から脱け出し復旧が成り、興隆に向って前進を始めた時期であった。これに伴い経済の高度成長と科学技術の高度化は産学協同の動きを促し、工学系大学の必要性が要望された。

また、18歳人口の急増期を迎え、高度な技術者の養成を奨励した時期でもあった。このような状況の中にあつて、本学園は永年、工業教育に実績があり、社会の要請に応え、新時代にふさわしい教育・研究環境を築くため、大学設置準備委員会を発足させた。

大学設置基準を満たすためには施設・設備に莫大な資金が必要であった。だが学園の資産状況は、4年制大学を設立するには不十



分であった。近い将来に4年制大学を設置することを前提に、まずは比較的实现性の高い短期大学として、初年度に機械科、次年度に電気科を設置する構想が決定された。

短大設置業務の中心的推進役は、錦織理事長を筆頭に草ヶ谷圭司校長、指宿俊徳法人事務局長があたった。

1学科の短期大学を設置するにしても、大同製鋼(株)1社からの支援だけでは不十分であり、産業界全体からの援助、協力を得なければならなかった。

当時の大同製鋼(株)石井健一郎社長は早くから日本経営者団体の役員として活躍されており、中部地区においては、主な経済団体である商工会議所、中部経済連合会、中部経済同友会等の要職にあり、また教育事業にも情熱を持たれ、本計画にも援助協力を惜しまれなかった。

昭和36年、学園を財団法人から学校法人大同学園に改組し、理事長錦織清治氏に加えて中部日本放送(株)社長佐々部晩穂、中部電力(株)会長井上五郎、東海製鐵(株)伊藤隆吉、名古屋市科学館長清水勤二各氏らが理事に就任した。石井健一郎氏の強い働きかけもあって、大同製鋼(株)を筆頭に中部電力(株)、名古屋鉄道(株)等の中部を代表する31社から寄付金を頂くことができた。

短大開設の業務は、教育目標、カリキュラムの作成、資金計画、施設設備の整備、寄付金募集、外部への広報、教職員の人事等を含む設置認可申請書の作成が必要であった。特に大きな資金を必要とする施設・設備の取得と整備については、高校の既設のものと共用として計画せざるを得なかった。

先ず土地については、高校が大同製鋼(株)から借用していた大同町の跡地5,300㎡と知多市の金沢運動場用地22,200㎡を大同製鋼(株)より寄贈頂き、また高校分校用として知多市より無償にて譲り受けた元岡田中学校の敷地の内、13,200㎡を大学専用、高校の白水実習室敷地1,100㎡を共用として、計41,800㎡として申請した。

建物は、大同工業高等学校が大同製鋼(株)より借用し使用していた本館1,800㎡と別館820㎡を寄贈頂き、既設の工学実験場1,150㎡を専用とし、高校の実習場等3,110㎡を共用、計6,880㎡として申請した。

機械器具と図書については、錦織理事長が中心となって調達した。教員については、学園関係者が教育関係者の知人を通じて人材発掘を行うと同時に、大同製鋼(株)と関連会社より専門家を派遣頂き、結果として学識、経験ともに優れた権威者を迎えることができた。

施設と設備については大学設置基準をやっとクリアする程度であったが教員については誇るべき陣容で開学することができた。

教育目標については、次の通り制定された。

「実学の殿堂」として「大同工業短期大学は人間教育を中心にして、国際的視野に立つ豊かな教養と、社会的識見を涵養するとともに成長発展する産業を展望し、専門技術に関して、的確な基礎知識と判断力及び創造力を有する実践的技術者の養成、即ち実学教育を本学の目標とする」。

具体的な目標として以下の事項が掲げられた。

・教員と学生の密接なふれあい ・基礎学力の重視 ・実験・実習の重視 ・情報化時代への対応

これらの目標を基にカリキュラムが作成され、基礎科目は当然のこと、特長として1年次から実験・実習科目が取り入れられた。

短大設置に伴う事務手続きは、法人事務局長と事務職員1名、加えて高校事務職員若干名で担当したが、指宿事務局長に業務が集中したため局長の心労は大変なものであった。

昭和37年4月大同工業短期大学が機械科入学定員80人にて開学の運びとなった。同年さらに南区元塩町に運動場用地を取得、教職員の増員を行い、電気科設置の基準をクリアし、翌年、入学定員40人の電気科が増設された。この時点で大同工業短期大学の敷地面積は大学設置基準を満たす状態に達していた。

大同工業大学の発足

昭和38年大同工業短期大学に電気科が発足したところで、錦織理事長から、間をおかず直ちに4年制大学を設置したいとの提案が理事会でなされ、申請することが決定した。

早速、同年7月中旬頃から大学設置準備作業を開始、約2カ月半の間に資金計画、教員の選考等を完了し、9月末日までの申請業務を終えなければならない極めて厳しい状況にあったが、不退転の決意と燃える情熱を持って事にあたったと当時を知る関係者の語り草になっている。

短大設置の時と同様、教員人事については、錦織理事長始め在籍の教員総動員で人材発掘の結果、優秀な中堅・若手教職員を迎えることができた。

施設と設備等については大同製鋼(株)始め、地元産業界等から多大の援助と協力を得て整備することができた。



▲大同工業短期大学

一方、事務業務担当の人員も限られていたが指宿事務局長他一致団結し事にあたり何とか申請書類を作成し、期限前日に文部科学省に運び、内容の審査を受けた結果、数十箇所の訂正が指摘され、宿泊先にて訂正作業に入り終了した時は翌日の明け方であった。

昭和39年機械工学科入学定員80人、電気工学科40人の大同工業大学が開学した。大同製鋼(株)から贈与された本館建物は経年数も古く、伊勢湾台風による風水害により傷みが激しく、3年計画の建替え工事の結果、同年、第1期の鉄筋コンクリート造り5階建校舎2,800㎡が竣工した。昭和40年第2期建物2,000㎡、昭和41年第3期建物1,760㎡が竣工し、大学本館が完成した。昭和43年大同町近郊に施設を集約する目的で、鳴尾グラウンドを廃止し、滝春グラウンド16,500㎡を取得した。

昭和44年木曽福島山の山岳地に土地を借用し、木造2階建の木曽駒ゼミナーハウス330㎡が建設された。錦織学長は教育方針のひとつとして、単なる技術者育成だけではなく、人と人とのふれあいを大事にされ、学園の財務状況が厳しい中にもかかわらず、教員、学生、卒業生、学園関係者が密接にふれあえる場所として、緑豊かな木曽駒岳の中腹に50名が宿泊できる施設が誕生した。

昭和44年3月17日、施設の完成を楽しみにしておられた錦織学長は病の為、木曽駒ゼミナーハウスの完成を見ることなく不帰の客となられた。享年65歳であった。

昭和45年、国の私立大学等経常費補助金制度がスタート、やっと本学園の財政は好転の方向に動き出した。昭和46年には2号館鉄筋コンクリート造4階建2,260㎡が竣工した。大学が発足以来、学園は機械工学科、電気工学科2学科の充実に注力してきたが、土木系と建築系から構成される建設工学科を設置するために、昭和49年、白水町の大同製鋼(株)所有の土地を借用し、鉄筋コンクリート造4階建3号館3,783㎡の校舎を建設、また同地内の一面に運動場を整備した。

昭和50年には、入学定員80人建設工学科が発足、在籍学生数は2千人を超え、新しい大同工業大学へと移行した記念すべき年となった。



▲本館第1期工事完成

謝辞 本稿をまとめるにあたり田中久博元大同大学事務部長の多大なるご協力に感謝します。



▲完成した本館



▲木曽駒ゼミナーハウス



▲2号館建設の様子



▲3号館(現 4号館)